

1.人來田の由来

人の往來の多さから

文治五年源頼朝が平泉の藤原氏を討つ為大軍を率いて出陣した際、羽前街道への通りで判官瀬を渡り人來田を通り抜けたそうです。屋号の一つに「高瀬」という農家がありますが藤原秀衡時代より藩政時代の伊達家の代まで名取川（判官瀬の上流）で捕った鮎を献納し続けたという。これが事実だとすれば高瀬という屋号は八百年前よりこの地にあり現在に致っておると推測されます。

屋号「北（きたぬい）」こと佐藤久左エ門氏を訪れ取材した際、過去帳に享保二年一七一六年徳川八代将軍吉宗の時代が記載されており三百年頃迄さかのぼって家柄を知る事が出来ました。家印も珍しく碇の印で名取川に近い所より職業に関係した家印だったのかも知れません。古い屋号をもつ家は三百年位前迄は過去帳等で家系などを探る事が出来ますが、二百年からの原型のままで残っている家は人來田には「前家（おめぬい）」ただ一軒だけで大切に保存し続けていただきたいものです。

多くの取材の内容から人來田は今も昔もインターチェンジの役割を果たし人の往來は多く、何時の間にか「人來田」と名付けられたのが地名の謎の感じが致します。明治三十二年町村制が施行され茂庭村と坪沼村が合併生出村が誕生致しました。[『もうひとつの仙台 おいで 生出第2号』 編集・発行・生出公民館（1988年）]

「一木田」という神話から

生出森の南麓、名取川の北岸に人來たという変わった地名があります。一木田と書いたこともあるようであるそうです。文化8年（1811）に著された「囊塵挨拶録」によれば昔この田のなかに榎の木の大木があり、枝葉が繁茂してこの辺の耕作の妨げとなっていました。この木は精の宿った大木で、しばしばこれを伐ろうとしたけれども、斧でも切れず、切り口は夜のうちに癒えてもとのようになるので、村人は後のたたりを恐れて伐ることを止めました。ある時、身の丈一丈余り（約3メートル）もある山伏が突然現れ、この榎木を引き倒してどこかへ持ち去って行きました。村人はこの山伏は神の使いであると信じ、感謝を捧げて、その後この地を一木田と名付けたと記してあります。一本の大木が広い田を被っていた里という意味でしょう。いつの世からこうなったかははっきりしませんが、一木田と同音の「人來田」の字句となって現在に至るとされています。